
リサを成長させる為に用意された（G、リサ、ダニエル）

efyin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リサを成長させる為に用意された（G、リサ、ダニエル）

【Nコード】

N5181D

【作者名】

efyin

【あらすじ】

リサ・ローガンは国際諜報機関AMSに所属しているトーマス・ローガンの娘。彼女はAMSエージェントではないが、父の相棒のAMSエージェントであるGと連携を取って事件を解決した事がある。この話しは微妙にG↑リサ↑ダニエル風。

ある家に、元気な足音が響いていた。

その足音は、本で溢れ返っている書斎から引つ切りなしに聞こえてくる。

「リサ。そのの、本は持てるか？」

と、静かな男の声がした。途端、本棚から本が崩れる。

「もうっ本に襲われるなんて」

尻餅をついた若い金髪の娘が、目を吊り上げながら自身に降りかかった本を払う。

「リサ。手伝いで疲れたなら、休んでいて構わないぞ」

見上げた娘の緑の目に、自分に向かい手を伸ばす怜悯な顔をした短い黒髪の男が映った。

リサの父で国際諜報機関AMSに所属しているトーマス・ローガンの、

古くからの仕事の相棒であるGだ。本名は知らない。

「そうじゃないの！」

彼が手を引っ張り、立たせてくれる。

「本当よ、G」

その時、ガチャンと玄関が閉まる音がした。

「G、玄関で変な音がしたの。聞こえた？」

「誰かが侵入したのか？」

Gが銃を構えて玄関の方へ飛び出すと、リサと同世代の、知的な雰囲気、茶色い髪の青年が、

両手にスーパールの袋をぶら下げ柔和な笑みをたたえて立っていた。

「ダニエル！？もうっ私は繊細なの。驚かさないでよ」

リサは溜息をつきながら言った。ダニエルは不思議そうな顔をしたが、

「僕は君を驚かせる事が出来て楽しい」

と言って面白そうに笑う。

彼の本名はダニエル・キュリアン。Dr. ロイ・キュリアン（通称 Dr. キュリアン）

の息子で、かつては末期の難病に冒されていた。

Gはダニエルの父Dr. キュリアンが働いているDBR研究所に任務で派遣される前、

Dr. キュリアンの不審な行動を監視していた過去がある。

また、ダニエル自身は死に瀕していたリサの父を救ってくれた恩人でもある。

Gとリサの二人は目を合わせた。ダニエルに合鍵を渡していた事を思い出したのだ。

三人で待ち合わせしてすぐ、

ダニエルは二人に昼食を振る舞いたいから材料を買いに行くと云ったので、

リサとGも少し寄り道をする事にしたのだった。

合鍵を渡したのは、万が一ダニエルが二人より先にGの家に着いた際に、

待たせてはいけないと言う配慮である。

ダニエルもリサの言動で事の顛末を悟り、話題を変える。

「リサはミスターGを、よく手伝いに来ていと聞いていたが、本当にそうなんだな」

貸して、とりサが手慣れた様子でGの冷蔵庫を開け、

ダニエルが買った食品を詰めていくのを見つめながら、ダニエルが言った。

「そうだダニエル。いつもニコニコして、よく手伝ってくれるから助かる」

Gの言葉に、意外だな、とダニエルは面白そうにリサを見る。

「それでダニエル、昼はどうするんだ？」

「僕の体力を消耗しない為に、リサにも協力して貰います」

Gは二人があれこれ会話をしながら仲良く料理しているのを確認し

て、

書斎の片付けを続ける。

Gは、幼いリサが転んだ時の記憶を甦らせていた。

リサは両親の目を盗んで近くの公園へ行こうとして転び、
たまたまローガンを訪ねて来たGに見つかった。

穏やかな気持ちが入み上げて来る。

「リサ……あまり無茶はするなよ」

写真をローガンから見せられただけで、リサと実際に会うのは初めてだった。

「うん。おじさん、名前は？」

「その傷の、応急処置の担当になったGだ」

Gは近くにあったアリの巣にハンカチを被せてその布を攻撃させる。
殺菌・消毒効果のある、アリの攻撃液の染み込んだ布をリサの傷に
巻いた。

「G？」

リサが首を傾げる。が、すぐに笑顔になった。

「ありがとうG」

ローガンの家のチャイムを鳴らす。

少女と同じ金髪の女性が出てGを招き入れた。

「ありがとうG。近頃の女の子はお転婆過ぎでしょ、私も時々ビツ
クリしてしまうの」

リサの母親、ソフィが事の顛末を知って半分笑み、半分困った顔で
礼を言う。

それから数時間後。

ローガン一家と別れの時が来た。しかしリサがGから離れない。

「リサ、もう傷はいいのか？大人しくしないと……」

「こんなの平気よ！」

Gがそっと抱き上げて離そうとすると更にしがみつかれる。

「G。リサを遠ざけたければ制止して、地面に膝をつけ」

ローガンに言われた通りにすると、リサを遠ざけるどころかキャッ

キヤと服を引っ張られた。

これではリサを遠ざけるのは困難だ。不可能ではないが。

「ははは。お前のような、子どもの対応の素人は見た事が無いぞ」
からかうように、ローガン。

「ローガン」

Gが普段子供と関わるなど皆無に等しい。

だがGは、自分は訓練されている人間だから、子供を扱えないはずは無いと思っていたが、

やはり実物は違うな、と感じる。

揺すられて、Gはハッとして目を開いた。

片付けの一休憩のつもりが、うたた寝していたらしい。

「ふふっGったら、小さい私を抱き上げるのが怖かったの？」

テーブルについたGから話を聞いて、リサはくすくすと笑う。

「ああ、だが抱く前の方が緊張した」

リサが探るような目でGを見た。

「ねえ、Gには夢がある？」

「夢……か。今の俺の夢は……」

真っ直ぐで正義感に溢れた男の娘と、絶望して歪んでしまった男の息子。

「いや、特に無い」

リサは軽く膨れっ面をした。

「あら、つまらない」

「分かった、そんな顔をしないでくれ」

Gは眉間に皺を寄せた。

「夢か……今思えば単純な事だが、当時は難しい選択だと思われた事はある」

リサが首を傾げた。

「？お仕事で何かあったの？」

「それは言えない。が、お前は利口な子だ、俺よりずっとな」

「リサ！そろそろ運ぶのを手伝ってくれないか？」

ダニエルがキッチンから呼ぶ声がした。

「今行くわ！」

ダニエルの方へ振り返って叫ぶリサにGは

「リサ。この先、どんな時でも自分の力に自惚れるなよ。

全体の流れを把握して、周りを良く見る事を忘れるな」

「分かってるわ。もうっパパが二人いるみたい」

じゃあ、楽しみにしててねG、とりサは楽しそうに笑ってダニエルの方へ駆け寄った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181d/>

リサを成長させる為に用意された（G、リサ、ダニエル）

2010年10月21日08時26分発行